

『消化器疾患の良導絡治療～過敏性腸症候群(IBS)患者としての経験を踏まえて～』

良導絡認定師 矢部裕太

【はじめに】

現代のストレス社会において自律神経は疲弊しやすく精神や内臓への負担も大きい。心と体の繋がりを心身相関というように、脳と腸の繋がりを脳腸相関という。この脳への情報が自律神経を介して内臓へ影響を与えるルートに悪影響が出始めると、過敏性腸症候群や各種消化器疾患へとつながる。今回は消化器疾患のなかでも下痢・便秘・機能性ディスペプシアにおいて、私なりの良導絡治療としての考え方を解説する。また自身が過敏性腸症候群(IBS)患者である経験を踏まえて、どのように改善を狙ったか、実際の生活にどのような影響があったかなど感じたことや得たことを話すなかで受講者の参考になればと思う。

【過敏性腸症候群(IBS)とは】

- 「下痢型」「便秘型」「混合型」「分類不能型」の4タイプに分類される
- 炎症性腸疾患などと違い、器質的な変化はみられない
- ストレスが大きな原因であると考えられている
- ストレス環境の変化、腸の蠕動運動の正常化、腸内環境の改善(食事)などが改善へと意識する点

【消化器疾患への良導絡治療のコツ】

- 体性—内臓反射を意識して、腹部や腰背部の筋緊張を緩めるポイントへ刺鍼する
- チャートの平均値が高い時は強刺激で治療点を少なく、低い時は弱刺激で治療点を多くする
- 治療点の数は、生理的範囲の高低・職業・年齢・体格・男女・急性・慢性などにより増減する
- 局所的な刺激(反応良導点や特効穴)のみに頼らず、基本型を用いるなど全身を刺激する

【消化器疾患への良導絡治療点】

